

平成29年度 佐賀市立兵庫小学校 学校評価結果

<b>1 学校教育目標</b>	<b>2 本年度の重点目標</b>
高きと知す・笑顔あふれる・チーム兵庫	①思いやりや心と徳の意識の向上 ②確かな学力の定着 ③ふるさとを愛する子どもの育成

達成度	A:ほぼ達成できた B:概ね達成できた C:やや不十分である D:不十分である
-----	--

重点目標を具体的に評価するための項目や指標を盛り込む

**3 目標・評価**

① 心の教育を推進する							
領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (表記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●心の教育	人権・同和教育の充実	・年間指導計画に沿って人権教育や道徳教育を計画的に行うと共に学校生活全般にわたって、指導していく。 ・ふれあい活動として、参観日に道徳の授業を公開し保護者・地域の方に本校道徳教育の理解を求めるとし、 ・月初めに「いじめいじめのちを考えると」を放送し、相手を思いやることの大切さを考えさせる場を設ける。 ・出席、役割、責任、承認を通して自己肯定感を育む。	・道徳性の育成に資する体験活動を推進し、道徳の実践力の向上を図る。 ・各クラスの授業を事前に一覧表にして「ふれあい道徳便り」として保護者に配布し、参観の参考にしてもらった。 ・「いじめいじめのちを考えると」では、毎月決まった日に各学級で指導を行い、その後の指導に有効であった。 ・6年生は、年間を通して、「多生利(すぶり)活動」を行い、自分の役割を責任をもって果たすことで自己肯定感が高まっていた。	A	・命の授業や情報モラルの授業などを行い、道徳の実践力の向上が図れた。 ・各クラスの授業を事前に一覧表にして「ふれあい道徳便り」として保護者に配布し、参観の参考にしてもらった。 ・「いじめいじめのちを考えると」では、毎月決まった日に各学級で指導を行い、その後の指導に有効であった。 ・6年生は、年間を通して、「多生利(すぶり)活動」を行い、自分の役割を責任をもって果たすことで自己肯定感が高まっていた。	・いじめいじめのちを考えるとの指導について、同学年や他の学年などとの指導を行ったの交流する時間を確保して、次の指導に生かしたい。 ・学校内だけでなく、他の機関から講師を招いたり、文科省などの資料を活用することで、効果的な授業を行えるように工夫したい。
教育活動	●いじめ問題への対応	人権教育の充実	重点指導事項(2つ) ①「ぼかぼか言葉」を使う児童を90%以上にする。 ②友達には「さん・くん」をつける児童を80%以上にする。	・毎月、児童への心のアンケートを実施する。各学期ごとに言葉遣い等の項目を追加して、アンケートを実施する。 ・毎月保護者へのアンケートを行い、実態や要望を把握する。 ・人権教室を定期的(学期に1回)に行う。 ・全校集会において約束事について指導し振り返らせる。 ・各学期の始業式の日「レインボー作戦」の指導を全校で行い、その後各学級で指導を行う。 ・教育相談週間を設け、子どもたちの様子を把握する。	A	・児童及び保護者への生活アンケートを毎月実施し、児童の実態把握や保護者の意識把握に役立っている。 ・「ぼかぼか言葉」を使う児童が94%、友達に「さん・くん」をつける児童が90%であり、昨年度より言葉遣いへの意識が高まった。 ・毎学期の人権教室により、相手の気持ちを思いやる児童が増えている。 ・学期はじめの全校指導「レインボー作戦」を受けて、各学級の指導に生かすことができた。 ・教育相談週間を各クラスで実施し、一人ひとりとじっくり話すことで、小さなトラブルを早期発見でき、解決できた。	・保護者へのアンケートを毎月実施したことで学校では分からないことに早期に対応することができた。来年度も引き続き実施していきたい。 ・児童が主体になって「レインボー作戦」を行ったことにより、児童の意識が高まってきたと思われる。来年度も引き続き意識の向上を目指し、全校での話を受けた後、各学年、各学級で取り組んでいく。
教育活動	○特別支援教育	特別な配慮が必要な児童への支援の充実	配慮が必要な児童の「個別的教育支援計画」「個別の指導計画」を作成し、全職員で共通理解を図るが指導にあたる。	・継続的指導が必要な児童に加えて、新たに配慮を要する児童の支援計画を作成する。 ・教育支援会議を適宜開いたり、校内研修で児童の支援方法についての共通理解を深めたい。具体的な支援を生かす。 ・「障害のある子どもたちの学校生活支援事業」による巡回相談員や外部専門家等を積極的に活用する。	A	・配慮が必要な児童は、個別の支援計画を作成して支援に生かすことができた。 ・配慮を要する児童については困り感が出た際、その都度教育支援会議を開き支援体制を話し合った。担任、関係職員等で話し合った。必要な場合は連絡会で報告して、全職員の共通理解を図ることができた。また、必要場合は関係機関へつなぐことができた。 ・巡回相談を積極的に活用することで、児童の具体的な支援方法を知り、支援に生かすことができた。	・配慮が必要な児童に適切な支援ができるように、今後にも必要に応じて支援会議を開いて共通理解を図りたい。巡回相談員を積極的に利用して助言を受けたい。 ・個別の指導計画を作成しそれをもとに生かすことができるように、「日々の子どもの記録」を書く時間を確保する。

**② 学力の向上を目指す**

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (表記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●学力向上	算数科の学力向上	・単元ごとに評価テストを実施し、各学年の達成率の平均を80%以上にする。 ・学年に応じた家庭学習時間を達成する児童を90%以上にする。	・算数科における研究授業を全職員で行い、課題意識を高める工夫や表現力が高まる授業の工夫をする。 ・評価テストは、市販のテストを使用し算数科のテスト結果を各学級から集めて集計して、指導に生かす。 ・4、5、6年生の算数科において毎時間2Tとし、少人数授業を多く取り入れ、きめ細かな指導ができるようにする。 ・4月に実施する全国・県学力・学習状況調査の結果を参考に、校内研修会で児童の実態を把握し、指導に生かす。 ・スキルタムを推進し、計算力の向上を図る。 ・家庭学習の手引きを配布し、家庭と連携して家庭学習の習慣を身に付けさせる。 ・年間を通して4回の「家庭学習がんばろう週間」を設け、家庭と協力して家庭学習の習慣化を図る。保護者、児童にアンケートをとって、結果をプリントで公表する。	A	・算数科では、少人数、TT担当が担任と連携し、校内研究のテーマである課題提示の工夫や表現力の向上に日々の授業で研究を深めてきた。また、全員が研究授業を行うことで様々な指導力が向上するよう努めてきた。単元毎の評価テストの平均は全ての学年で80%を上回った(88.0%~94.5%)。 ・全国・県の学力・学習状況調査の結果から、各学年の学力を分析し、弱點と思われるところは単元や復習の時間に繰り返し指導し補強した。 ・「家庭学習がんばろう週間」では、保護者アンケートに加え、家庭学習のチェック表を毎月実施することで、児童の意識を高めることに努めた。家庭学習時間を達成した児童は、6月の第1回は95%、9月の第2回は97%、11月の第3回は96%であった。目標を上回っているが、期間以外でも、集中して取り組めるように指導したい。 ・学習のルールの重点目標を決め、ポスター掲示、放送、アンケート等様々な方法を使って徹底を図った。全校で共通理解して指導にあたったことで、授業態度が向上した。	・来年度も今年度と同じ「課題提示の工夫と表現力の向上」という研究テーマで研究を進めることで、継続した指導ができ、教師の指導力の向上と子どもたちの学力の向上を目指せることを考える。
教育活動	●教育の質の向上に向けたICT利活用教育の実施	全教諭に対しICT教育に関する指導力の向上	・各教室に配備された電子黒板を、年間授業日数の90%以上の稼働をめざす。 ・デジタル教材や機器についての操作技能を高める。	・夏期休業中にICT支援員による校内研修会を開き、電子黒板を中心とした情報機器のより効果的な活用方法を検討する。 ・授業に有用なアプリケーションの操作について知り、動画などの視聴覚教材をより多く活用できるように情報を共有する。 ・電子黒板の稼働率を職員に示して意識をさせる。	B	・各教室に配備された電子黒板の稼働率は、平均約91%であった。学習の場としての活用が広がった。また、全校共通の動画や電子黒板で授業など、集まりが広がるなど、中学校と連携した取組ができた。 ・全校授業には各課目50キックオフ宣言を行い、毎月エコランジャー週間を設定して、意識化を図る。 ・授業のルールの重点目標を決め、ポスター掲示、放送、アンケート等様々な方法を使って徹底を図った。全校で共通理解して指導にあたったことで、授業態度が向上した。	・タブレットの活用を促進するために、例えば、低学年では画像の撮影、中・高学年ではローマ字入力、文書作成、高学年では調べ学習やプレゼンテーションといった具合に学年で利用方法を共有し、使用頻度や体感の有用性、クラス間差をどうにか活用できるようにしていきたい。
学校運営	○学年・学級経営	学年・学級経営の充実	・PDCAサイクルを取り入れ、Q-Uテストの結果を生かしたりして、学級経営に生かす。 ・学年の協働意識を高め、職務の効率化と児童への指導の充実を図る。	・学級経営案を公表し各自の取組に対して意識化を図る。 ・来曜日の学年会の中で、情報交換や協議を行い、共通理解に基づいた協働を推進する。	B	・夏期休業中に、Q-Uテストの結果の分析を全ての学級で行い、2学期以降の学級経営の手立てを考えたことができた。 ・学年主任を中心とした体制がさらにでき、専任が誕生した時は学年主任を中心と動く事ができていた。学校評価アンケートの「学年での共通理解が深まり、協働的学級経営が行われている」項目では「あてはまる」「ややあてはまる」が34%が回答している。 ・各学年、時間を作って学年会を行い、情報交換ができた。	・Q-Uテストの2回目を行うことで、手立での有効性が確認できるが、現状では入っていない。予算等を今後の課題とする。 ・学年での情報交換や、学年対応の時間がきちんと取れるように今後も時間を計画的に設定する必要がある。

**③ 地域を愛する子どもを育てる**

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (表記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	○ボランティア活動	環境教育の充実 地域との連携	・学校とその周辺の地域の環境を自分たちの手でよりよいものにしようとする児童を育てる。	・地域と連携して、学校や周辺地域を清掃する「東城校区クリーン作戦」を行う。 ・全校児童による環境SOキックオフ宣言を行い、毎月エコランジャー週間を設定して、意識化を図る。	A	・地域の方や保護者と一緒に行う、周辺地域を清掃する「東城校区クリーン作戦」を行った。その際、東城中学校の生徒にも参加し、児童と一緒に清掃するなど、中学校と連携した取組ができた。 ・環境SOキックオフ宣言を行い、毎月エコランジャー週間を設定して、意識化を図る。 ・活動が停滞しないよう、エコクラブなどの取組みも、回収強化月間を設ける。	・ISO活動や学校全体の取り組みとして全員が意識できるよう、年度初めに組織委員会を作成する必要がある。
教育活動	○総合的な学習	生活科学習の充実 総合的な学習の充実	・生活科や総合的な学習の中で、地域の人・もの・ことへの学習を盛り込み地域のすばらしさに気付かせる。 ・保育園・幼稚園や町内福祉施設などとの交流を通して共生社会の一員としての自覚を育てる。	・生活科や総合的な学習の中で、各学年に応じた地域・人・もの・ことに関する内容を盛り込み、児童の体験による学びの場を保障する。 ・学校便りやホームページ等で地域へ子どもたちの心のかかりを積極的に情報発信し、地域と子どもたちとの密接な関係を作り出す。	A	・(生活科) 生活科・幼稚園・保育園を招待しての「入学体験」では、学校生活のことを知ってもらうために、意欲的に準備を進め、「小学校の先輩」という気持ちをもって活動することができた。 ・地域の来賓にいただいた「普通日」では、普通日を教えていただくだけでなく、お礼状、おはあさんとの交流を深めたいことができた。 ・(総合的な学習の時間) 公民館・福祉施設を訪問し、見学や交流をする中で、地域の人やものについて学び、その良さに気付かせることができた。また、地域の方の協力を得て、水や大空を育てる体験とし、収穫の喜びや物流通について学ぶことができた。活動の様子については、学校便りやホームページで紹介することができた。	・地域の施設や田んぼでの活動をより充実したものにするためには、早めに計画を立てて、事前の打ち合わせを十分にしておく必要がある。

**本年度の重点目標に含まれない共通評価項目**

領域	評価項目	評価の観点 (具体的評価項目)	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題 (表記の理由)	具体的な改善策
教育活動	●健康・体力づくり	運動習慣の改善 定着化	・休み時間には、外に出て元気に遊ぶ児童を育てる。	・学級や各委員会の計画により、外遊びの機会を多く設けるようにする。 ・生活重点月目標を設定し、集会の講話や掲示資料を活用した指導を行う。 ・生活アンケートを行い、実態を把握し、学校便りや学年通信を通して保護者への啓蒙を図る。	A	・各学級で「みんなで遊ぶ日」を設定したり、全校で縦割り遊びを実施したりしたことで、大多数の児童が外に出て元気に遊んでいた。 ・委員会で縦割り遊びを企画して、計画的に活動できた。 ・冬にマラソンチャレンジを行い、多くの児童が参加できた。	・インフルエンザが流行する時期は避けて、企画することが望ましい。スポーツチャレンジをもっと広めていく。
教育活動	●食育	望ましい食習慣と食の自己管理能力の育成	・児童、保護者に食の大切さの認識を高め、朝食の喫食率を90%以上にする。	・「給食便り」で食育に関する内容を提供することによって、意識を高めてきた。 ・6月・12月と2回(の)早寝・早起き・朝ご飯実践カード」を実施することで、朝食の必要性を認識させた。喫食率68%以上であった。	A	・「給食便り」で食育に関する内容を提供することによって、意識を高めてきた。 ・6月・12月と2回(の)早寝・早起き・朝ご飯実践カード」を実施することで、朝食の必要性を認識させた。喫食率68%以上であった。	・喫食率は、90%以上であったが、ある特定の家庭が朝食をとっていないこともあった。今後朝食の必要性を喚起することが重要である。

**4 本年度のまとめ・改善の取組**

本校の教育目標は概ね達成できた。保護者の「兵庫小学校をよりよくするためのアンケート」からは、ほとんどの項目で90%前後での肯定的な回答が得られ、教育活動に対して高い評価を得ていると考える。また、学校評価委員の方々からもよい学習環境で取組がなされているとの高い評価を頂くこともできた。3部会を中心に、学校がチームとして協働的に働けるようにと職員それぞれが自分の役割を自覚して教育活動にあたることでこれらの結果につながっていると考えられる。今後ますます「若手の職員が増えることは間違いない。次年度は、兵庫小学校の伝統文化を継承していくこととさらにそれを発展させていくことが課題となる。学び続ける姿勢と元氣いっぱいの実績を絶えず「一人」が「友達とみんなで」地域で「べき」とを判断し「べき」ときに実践できる児童の育成をめざしたい。

●は共通評価項目、○は独自評価項目